

「農家を支えたい」
がいつからか
「農家になりたい」
になっていました



國本 英樹 (くにもと ひでき)

1993年生まれ横浜育ち。2018年北海道大学大学院農学院修了後、農林水産省に入省、その後農業法人でアルバイトを経て、2020年4月就農実習生として栗山町地域おこし協力隊に着任

栗山町で地域おこし協力隊員になり二年目、農業支援員として受入農家（親方）の下で農作業をしながら独立に向け準備を進めています。親方の農場で栽培・管理・収穫・選別全ての工程を教わりつつ、消防団にも入るなど地域活動にも参加しています。

【農業への道】

横浜育ち、大学で北海道に来て農業経済を学び、ゼミの農家調査をはじめ個人的にも暇を見つけては道内の農家を練り歩きました。初めて訪れたまちが実習授業で来た栗山町です。当時宿泊した施設の隣の棟に7年を経て住むことになるとは、当時は思いもしませんでした。

どっぷりと北海道農業に浸かった生活を大学院まで6年間過ごし、農林水産省に入省しました。農水省では農産物の安全性を守るための規制を行う部署に配属され、今までのフィールドワークとは違った科学的な知見から農業を見る機会を得ました。一方で、学生時代巡った農業現場が忘れられず、働きながらもキャリアパスを考え直しました。国家公務員の激務は初めか

らわかってはいましたが、それ以上に北海道への思いと、政策をつくることよりも農家という姿そのものが好きだったことに気付いたのが大きかったです。

そして、当時付き合っていた妻に就農の話を持ち掛けると、意外にもほぼ即答でオーケー。ここから就農に向け、まず半年間で結婚、退職、北海道への移住（出戻り）まで進めました。ずっと目指していた農水省とはたった一年と三か月の付き合いとなってしまいました。

北海道に戻ってから即研修ではなく、まずは就農する市町村選びのため一度農業法人でアルバイトとして働きました。安定した公務員からアルバイトへの転向は、夢をかなえるためとは言え不安がなかったと言えは嘘になります。親にも心配をかけました。

【栗山町で農業～人とのつながり】

就農地選びに際しては、営農、生活面で譲れないことを絞って妻と検討しました。例えば、妻は自由な販路を持ちやすい場所がよいこと、私は将来博士課程を取りたいので大学のある札幌に通える範囲であること、などです。そんな中で栗山町は、そうした条件を満たしつつ昔から知っている馴染みあるまちとして縁を感じました。学生時代から知っていた栗山町農業公社の担当者とは再会したのも自然と背中を押してくれたようです。

コロナ禍で世の中が騒がしくなってきた2020年4月、私が地域おこし協力隊員となり、妻とともに親方の農場で研修をスタートさせました（今から考えると、動き出すのが少し遅ければここまでスムーズに事を進めることはできなかったでしょう）。

【地域おこし協力隊として】

私は協力隊員の中でも農業支援員という枠で、独立就農による定住を前提として採用されています。栗山町には、農業以外で事業を興して活動している他の協



力隊員の方々もいます。町の農産物をPRする活動をしている方もおり、そうした活動に農家として関わるのは就農後の楽しみにしつつ、まずは目の前の研修をしっかりとこなすことが重要だと感じています。

私は、研修には三つの重要な側面があると思います。それは、①農業技術の習得、②就農の準備、③親方家族や地域の人たちとのコミュニケーションです。

まず、疑問に思ったことはすぐに聞いてわからないことをなくし、なるべく親方のそばで見えてどんなやり方をしているのか技術を「盗む」ことを心掛けています。去年は研修1年目で「まだ来年がある」と言っていたのですが、今研修としてやっていることは全て最後の作業です。また、親方の土地を借りて就農後の主力品目に考えている大玉トマトと長ねぎを試験的に栽培させてもらっています。親方と違うやり方を試しても自由にやらせてもらい、こちらから言えばそれに応えてくれる環境にはとても恵まれていると日々感じています。

こうした技術の習得も重要ですが、ビニールハウスを建てたり農具を集めたりする物理的な準備もこの期間にやらないと、独立してゼロからでは成り立ちません。そのために、研修の空いた時間でハウスの骨材を就農予定地に運び入れさせてもらうなど準備を進めています。

そして、研修はただ作業をしに農場へ通うだけでなく、親方の家族や近隣農家などと関わることが大切だと思います。そうした繋がりから土地や機械を譲ってくださる話も出てくる、密なコミュニケーションの空間です。何より飲みに誘ってくれるなど、一人ではないと感じることが心強いです。

今はとても充実した生活を送っていますが、それも来年から本当のスタートを切るための前段にすぎませ



ん。まずはしっかりとした農業経営者として技術、資本基盤を確立することが先決です。その上で、前述のように大学に戻って研究をすることが目標です。最後に少し今の農業に対する思いを話そうと思います。

【今後の農業への思い】

農業というと、高齢化による従事者の減少をはじめ課題が山積、斜陽産業的なイメージが強く、一方で最近ではスマート農業などで省力的、先端的な仕事のイメージもついてきて法人化による雇用も進んでいます。ただ、それでも農業界の新陳代謝は思うように進んでおらず、若い人、特に国立大学を出るような人たちにとって農業という仕事はまだまだ遠い存在でしょう。

しかし、私は農業ほど生化学や物理をはじめとした知識を駆使して自分の裁量で働くことができる自由度とやりがいのある職場はないと思います。問題は、説明会に参加して大企業への就職を目指す「就活システム」の中で、農業や自営業という選択肢が初めから除外されてしまっているということです。そうした職種を「やろうと思わない」だけでなく、そもそも「自分ができるなんて思わない」のが今の職選びの現状なのではないでしょうか。

就活システム自体は中々変わらないかもしれませんが、農業界がこの状況をもっと認識して優秀な人材を獲得するための行動をしなくてはいけない、危機感を共有しないといけないと思います。

そのために、今北海道の農家が何を考え行動しようとしているのか、農家としての主体性を持ちつつ客観的な分析をするための農家と研究の二足の草鞋を目指しています。

長いようで短い人生、自分のやりたいように生きるのが楽しいではありませんか！

